

「雄馬くん、また寝ぐせのまま来たの？」

「寝坊しそうだった！でも、涼香さんがかっこよくしてくれるでしょ？」

女優鏡の前で笑う、ぼさぼさ髪の桜井雄馬は最近女性の心を鷲掴みにしている売れっ子俳優。この時代には珍しい強引な俺様キャラを見事に演じきり、俺様再ブームを巻き起こしている張本人だ。

先日は「抱かれない男」というまた時代遅れなランキングで堂々一位。しかし本人は俺様というよりちょっと抜けてる大型犬みたいで。4歳しか離れていないのに弟のように感じる。

「もう、スキンケアはちゃんとした？」

「教えてもらったやつだけ～」

硬い茶髪のくせっ毛をヘアクリップで止めて、化粧水を含んだコットンを毛穴一つない頬に滑らせる。彼のメイク担当になって、もうすぐ3年が経とうとしていた。

目立った功績もない私をずっと指名してくれて、売れた今も任せてくれるのは嬉しい。けど、自分の技術がどんどん俳優の階段を駆け上っていく彼に追いついていない気がする。もっと雄馬くんを輝かせられる人はいるんじゃないかって。最近そんな考えが巡っては見ないふりをしていた。

「あれ、涼香さん。指どうしたの？」

「ああこれ？ヘアアイロンで火傷しちゃって」

「えー！大丈夫？」

「平気平気」

ベースメイクを終え、先にリップコンシーラーをのせていく。ちらりと鏡越しに仕上がりを確認して、そっと顎を持ち上げ近づいた。指先が触れた瞬間、ぴくりと睫毛が揺れて瞳がさ迷う。

「はい、薄く口開けてね」

「ん……」

ずっと知らないふりをしているけど、雄馬くんは私が顔に触れるたび耳が赤くなる。こんな初心な子が抱かれない男、か……。デビュー直後から知っているけど、この調子じゃ悪い人に捕まらないかちょっと不安。今日もまた、染まった頬を隠すようにパウダーを払う。

「はい、セットも完了。お待たせ」

「どう、かっこよくなった？」

「ふふ、かっこいいよ」

鏡越しに答えれば、満足そうに笑って席を立つ雄馬くん。穏やかな垂れ目をさらに下げて、私を少し高いところから見つめた。

「涼香さん、最近忙しい？ちょっと顔色悪いっていうか」

「え、そうかな？……今日、朝ごはん食べ損ねちゃったからかな」

「ケータリング好きなの食べてね。ほら、涼香さんが好きな甘いパンとかあったよ」

「うん……ありがとう、あとでいただくね」

思わずそっと、机の上に置きっぱなしだった栄養ドリンクの空き瓶を移動させる。雄馬くんはそれに気付かず、笑顔で楽屋を出て行った。

ひとたびカメラが回ってしまえば、自信満々で上から視線な俺様雄馬様が現れる。何度見ても切り替えがすごくて新鮮に驚いてしまう。あんな顔をまだ隠し持っているんだ、と。本当は初心だ、なんてSNSに書いても誰も信じないだろう。

ドラマの撮影は佳境に入って、今日は大事な告白シーン。相手を掻き抱いて感情をぶつける場面だ。何十人のスタッフが見守る中、撮影が始まる。

「何回言わせれば気が済むんだ。さっさと俺にしとけよ……」

そのまま激しいキスをして、ヒロインを強く抱きしめる。あー、あんなふうに情熱的に求められてみたい。こんなこと、ドラマの中でしかありえないけど。

「カット！確認しまーす」

このあとに顔をアップで撮るシーンがあるため、雄馬くん近づきメイクを直す。楽屋のときとは違う、獰猛で鋭い目つきはやっぱり「抱かれたい男」そのものだ。今はまだ役が抜けてないのか、ギラギラした瞳がこちらを射抜いてくる。

いつもは目なんて合わないのに。なんて言わず黙ってリップブラシを手にとった。キスでよれた口元を直していると、すりっ指が頬を撫でた。

「こら、私は相手役じゃないよ」

「……分かてる」

何が分かてるの！？意味ありげに口の端を撫でたと思えば、人差し指の腹で輪郭を確かめるようになぞって、耳の裏をすりすりと擦られる。

ぞくり、背筋にビリビリした刺激が走った。楽屋とは違う、意地悪で試してくるような目で見てくる。そんな手つきで触られたら、どんな顔をすればいいか分からない。

「はは、耳弱いんだ？」

「……雄馬くん、やめて！」

名前を呼ぶと、ぱちぱち瞬きをした。丸くなった目が私を捉えると、いつものように視線をうろつかせる。こちらを試すように触れていた手は宙に浮き、そのまま両手をあげて降参ポーズをとった。

「ご、ごめん。役が抜けなくて。嫌だったよ、ね」

「……びっくりするから止めてね」

もうすぐ撮影が再開されるらしい。またスタジオの薄暗い端っこの方に移動してひとつ息を吐いた。貫かれるような、こちらを離さない瞳。それに反して優しい指先。撫でられた耳はまだジクジクと熱を帯びていた。

「あんな熱、向けられたら堪ったもんじゃないな……」

さっきまで「求められたい！」とか思っていたけど、前言撤回。いざ視線を向けられたらどうしていいか分からなかった。

今日の撮影が終わると、とことこ雄馬くんがこちらへやってきた。メイクブラシを片づける手を止めると、カメラ前では吊り上がっていた眉毛は思い切り下がっていた。

「涼香さん、さっきはごめんなさい……」

「ふ、あはは！大丈夫だよ。それだけ役に入ってたってことでしょ」

もう崩れてもいい頭をポンポンと撫でれば、周りに花が咲くように分かりやすく嬉しがる。世間では狼とかハスキー犬とか言われてるけど、今は尻尾ブンブンの大型犬だ。高い頭をちょっと下げて撫でてもらおうとしてるなんて、ファンの子が見たら倒れちゃうかも。

「あ、ちょっと待ってて」

なんだなんだ、とその場で少し待っていると雄馬くんが蓋つきのカップを持って戻ってきた。近づくにつれ香るコーヒーの匂い。

「これ、さっきのお詫びってことで……」

「もう、気にしなくていいのに。ありがとう」

受け取れば、ようやく安心したように雄馬くんは楽屋へと戻っていった。さて、とカップを持って少し困ってしまう。

お腹空いてるときコーヒー飲んじょうと、気分悪くなるんだよな……。まだ温かいコーヒー片手に逡巡していると、雄馬くんのマネージャーさんが視界に入る。

「お疲れ様です」

「ああ、川口さん。お世話になってます」

「あの一、今雄馬くんからコーヒーもらったんですけど。私、空腹でコーヒー飲むと体調を崩してしまうので……」

「なるほど。じゃあそれは僕の方で飲んじゃいますね」

「すみません、助かります」

雄馬くんと同じく3年の付き合いがあるマネージャーさんは話が早くて助かる。申し訳なさでちょっと胃が痛い。こんなことならちゃんと朝ごはんを食べておくべきだった。

「ちゃんとしないとな……」

もう若くはない自分に焦りながらも、その場を後にした。

「雄馬！ビッグニュース！」

「マネさん？どしたの？」

また別の撮影日。楽屋で準備をしていると、いつも冷静なマネージャーさんが慌てたように飛び込んできた。

「虹川さんの雑誌撮影が決まったぞ！」

「え！すごいじゃん雄馬くん！」

カメラマンの虹川さんは業界ではかなり有名で、独特で耽美な世界観が代表的だ。虹川さんに撮ってもらえたら一人前、という人もいるくらい。雄馬くんも嬉しそうに笑って、私の肩をポンッと叩いた。

「じゃあ、涼香さんもよろしくね！」

「えっ」

思わず固まってマネージャーさんを見やる。そうだよな、何とも言えない顔になるよね。

今回のような大きな撮影では、制作側が用意したヘアメイクチームを入れる場合もある。私が同行できると決まったわけではない。

「制作側にも確認するけど、雄馬が川口さんを希望するなら、その前提で調整はしてみます」

マネージャーさんの少し困ったようなニュアンスに、私は慌てて雄馬くんの手を下ろした。

「さすがに今回は、もっと実績のある人に頼んだ方がいいんじゃない？」
「なんで？ 涼香さんだってプロじゃんか」
「そう、だけど……」

真っすぐこちらを見据える目から逃げて、楽屋の床を見つめる。今から口にする言い訳が情けなくて、仕事に真っすぐな彼の目を見て言えなかった。

「虹川さんって、納得いく写真を撮るには妥協しない人なの。すごく厳しいって有名だし。そんな人を納得させられるメイクを、私ができる自信が、ない」

私の代わりなんていくらでもいる世界だ。積み上げてきた信頼も、ネームバリューと運と、たしかな実力でいくらでもひっくり返される。それこそ、雄馬くんみたいに人気が急上昇した人の裏には、たくさんの日の目を見なかった人がいる。私はそちら側というだけ。

ぐっと腕を引かれる。目の前には、真剣な表情でこちらを射抜く垂れた大きな目。いつもの優しい雰囲気でも、カメラ前の鋭いものでもない。私の深いところを探ろうとする目だった。

「なんでやる前からそんなこと言うの？ 俺、ずっと涼香さんに任せてきたのに。もう、あなた以外に顔を触らせたくないんだけど」
「そ、んなこと……」

目を伏せると、そっと手を離されて雄馬くんは自分の荷物の方へ行く。何かを取り出すと、それを私に握らせた。

「ハンドクリーム？」

「人の肌は気にするくせに、自分のことは後回しにするくらい頑張ってるのに」

「だって、私はまだまだだから」

「じゃあ、俺の顔を使って自信つけてよ」

手を頬へと導かれる。吸い付くような肌は、雄馬くんがスキンケアを怠らなかった証拠。こんな完璧なキャンバスに触れたい人は、この世界で何万人もいるだろう。

今までずっと、私の手が彼の顔を作ってきた。その事実と信頼を、自分で潰してしまっていいのだろうか。

状況を見守っていたマネージャーさんに頭を下げる。こんなに期待されてしまえば、こちらも本気を見せないと。

「必要な準備は全部します。今回も、雄馬くんを私に任せてもらえませんか」

まだ少し心配そうなマネージャーさんは、雄馬がどうせ言うことを聞かないから、と了承してくれた。ここまで大口叩いたからには頑張らないと。

ぐるぐる考えていると、また雄馬くんにそっと手をとられた。そこにはいつもの穏やかな顔で、少し安心してしまう。

「俺の顔を触る手なんだから、大事にしてね」

もらったハンドクリームを出して、両手に塗り込まれる。無香料でべたつかないから、重宝しそうだ。仕事柄なかなか手が出せてなかったけど、これなら気兼ねなく使えそう。

「へへ、ありがとう雄馬くん。商売道具なのに、全然手入れできてなかったや」

「もっと自分のこと大事にして」

きゅっと両手を握られ、思わず手を引っ込めた。お礼をいながらメイク道具の方へと向かう。

ダメだ、私の手を心配してくれただけで、私に優しくしてるんじゃないんだから。少し眉毛を八の字にしてこちらを見つめる雄馬くんを忘れようと、軽く頭を振った。

そんな大層なことを言ってしまったら、こちらもしっかり準備しなければいけない。自分の足りない部分を目の当たりにするたびに、現実には打ちひしがれることもあったけど。

「弱音吐いてられないよね」

へこたれそうになる度、もらったハンドクリームで気合を入れ直していた。

「涼香さん、また寝不足？疲れてる感じる」

撮影途中、メイクを直している最中にギクッと肩を揺らしてしまう。一度考え出すとあれもこれもと調べてしまって、最近は寝るのが遅くなっていた。

「色々勉強しなおしてるの。たしかに根詰めてるけど……そんな時間もね、楽しいんだ」

少しずつ改善していくのが自分でも分かって楽しい。初めてメイクをした日みたいにワクワクしている。

「そっか。なら良かったけど、無理しないでね」

「ありがとう」

メイク直しが終わって離れると、雄馬くんはまた蓋つきのカップと小さめのサンドイッチを渡してくれた。今日もまだ食事を摂っていない。サンドイッチ食べたらコーヒー飲めるかな。小さな気遣いに胸の辺りが温くなる。

「はいこれ、ちょっとは休憩してね」

「うん、いただきます」

満足そうに撮影へ戻るのを見送って、さてとカップを見る。ん、あれ？これって……。

「コーヒーじゃない？」

一口飲んでみると、それはストレートティーだった。これならコーヒーより胃に優しいそう。でも、今日はコーヒーも置いてあったはず。今日が紅茶なのは……たまたまかな。とりあえず、ありがたく飲ませてもらうことにした。

そんなこんなであつという間に撮影当日。正直緊張で吐きそう。楽屋でひとり、スキンケアアイテムを並べたりメイク道具を最終確認したりして、マイナスな考えをどうにかかき消していた。

「これで大丈夫かな……」

「緊張してる？」

肩に顎を乗せられ囁かれた。低い声が急に鼓膜を揺らして、驚いて振り返ると普段通りの雄馬くんが笑ってる。なんで本人が余裕そうなんだ。

「大丈夫だよ、涼香さんなら」

「簡単に言ってくれるね」

「だって、虹川さんってすごい人でしょ？俺が俺でいるために、涼香さんに頼んだんだもん」

最初の衣装に着替えた雄馬くんにはケープを掛ける。いつものように前髪をクリップで止めて、鏡越しに見つめた。今日はばっちり目があって、ちょっと鼓動が落ち着く。そうだ、今は緊張している場合じゃない。

今は、この売れっ子俳優の桜井雄馬に指名されている、信頼されていることを糧に。震える手を何とかおさめて、顔に指を滑らせた。

普段の甘い垂れ目を残しながら、今日は赤と紫で強さを足した。いつも上げている前髪も下ろして、視線だけで惹きつける顔にする。

ひとつの芸術品を創り上げるように重ねていったメイクは、ずっと見てきた雄馬くんの魅力を最大限引き出せたのだろうか。あの世界観に負けないけど溶け込むラインを攻められたのだろうか。

「はい、セットも完了。お待たせ」

「どう、カッコいい？」

いつもみたいに聞いてくる雄馬くん、しっかり頷き返した。

「うん、すごくカッコいい」

「じゃあ今日は大成功だ」

どれだけ緊張したって、結局表に立つのは雄馬くん。いいことも悪いことも浴びるのは表舞台の人たち。だから自分は逃げている。石を投げつけられないところから、輝かしい舞台を見つめているくらいがちょうどいい。

スタジオで待機していると、気難しそうな40代くらいの女性がヒールを鳴らして入ってきた。虹川さんだ。スタッフたちが挨拶するなか、雄馬くんを上から下まで舐めるように見ていく。自分が見られているわけではないのに胃が痛い。雄馬くんは自信ありげに、黙って微笑んでいた。

「あなたが桜井雄馬くんね。今日はよろしく」

「撮影に参加できて光栄です。よろしくお願いします」

「で、メイクは誰？」

「は、はい！」

急に呼ばれて駆けていけば、顔も見られず指示が飛んできた。

「リップ、もう少し深い赤に変更して。肌もマットに。照明で色飛ぶから全体的にもっと濃くして。すぐ撮影始めるから急いで」

「はい！」

久しぶりのひりつく現場。しかし、この空気が嫌いじゃなかった。

目まぐるしく衣装もセットも変わっていく中、置いて行かれないようにメイクもどんどん変更していく。飛んでくる要望に応えるよう、雄馬くんの顔を仕上げていった。

カラン。

「あ、ごめんなさい」

手から滑り落ちたメイクブラシを拾い上げる。ダメだ、さすがに疲れてきた。緊張も含んで力が抜けてきた手を振って、新しいブラシを握る。

「涼香さん」

「ごめんね、ちょっと焦っちゃって」

「いつもなら、無理しないでって言うところだけど」

鏡越しに目が合う。ふっと細められた目は普段と違う強気なメイクからか、私の柔らかいところを握るようだった。逸らしたいのに、逸らせない。

「俺を、世界一カッコよくしてね」

「……もちろん」

いつしか手の震えは止まって、口角は無意識に上がっていた。

薄暗いスタジオの隅っこ、いつもの定位置で撮影を見守る。最後の衣装ということもあり、私の仕事はとりあえずひと段落だ。小さく息を吐く。やっと力を抜いて撮影を見ることができる。

「じゃあ、モデルさん入って」

虹川さんの一声で、女性モデルが雄馬くんの隣へ歩いていく。薄着の彼女を抱きしめるようにして、肩口から雄馬くんがカメラを睨んだ。そのまま色々な絡みのポーズが指定され、その度2人の距離は近く、過激になっていく。最後ということもあり、水面に寝転がって二人は見つめ合ったり触れ合ったり。

ちらり、とモニターを見たときに雄馬くんと目が合った。正確にはレンズに向かって微笑んだのは分かっているけど、その表情があまりにもこちらを求めているような、熱い視線でぐっとつばを飲み込む。

この表情を引き出す一部になれたことに、とんでもない幸福感と羨ましが募った。だってこの顔は、私に向くことはない。私に向けられるのはいつだって可愛い年下の男の子の無邪気な顔。この瞳が、自分だけに向いたらどんな気持ちなんだろう、なんて場違いなことを思ってしまう。

「撮影は以上です！お疲れ様でしたー！」

スタッフさんの声で我に返る。遅れて拍手に参加すると、虹川さんがカメラを預けてこちらに歩いてきた。軽く頭を下げて他のスタッフさんと挨拶をすると、ぴたりと私の前で足が止まる。

「あなた、お名前は？」

「えっ、あ、川口涼香と申します」

ふうん……と私を舐めるように上から下へ見る虹川さん。何を言われるんだと内心ひやひやしながら笑みを浮かべると、ぽんと肩を叩かれた。

「彼の魅力をよく引き出せてた」

「あ、ありがとうございます！」

「でもまだまだ経験不足ね。もっと場数を踏めば成長するわ。名刺、頂戴できるかしら」

「は、はい！」

震える手で名刺を差し出せば、虹川さんもシンプルなデザインの名刺を差し出す。

「それじゃ、またお仕事できるの楽しみにしてるわ」

「ありがとうございます！」

深々と頭を下げて、遠ざかるヒールを聞く。やっと顔を上げると、手元の名刺でやっと実感がわいてきた。やばい、虹川さんと名刺交換しちゃった！？

「はっ、雄馬くんのとこ行かないと」

普段と違う特殊なメイクをしているため、クレンジングもしっかりしないと。興奮冷めやらぬ状態で楽屋へと戻った。

「ごめん雄馬くん、おまたせ！」

「お疲れ様。全然待ってないよ」

びしょ濡れだった雄馬くんは、ズボンだけ着替えたみたいで、バスタオルを肩から掛けていた。ぽたぽた髪からしずくが落ちていて、ちゃんと拭いてないらしい。

「ちょっと、ちゃんと拭かないと風邪ひいちゃうよ」

「ん〜、じゃあ涼香さんが拭いて？」

「もう、メイクも落とさないといけないのに」

しょうがないなあ、と笑いながらコットンにクレンジングをたっぷりしみこませる。先に目元だけ拭き取ってね、と手渡してご要望通り頭を拭いてあげた。

「今日の俺、かっこよかった？」

「今日も、かっこよかったよ」

「よかった。俺も結構緊張してたから、バレなくてよかった」

「うそ？堂々として気づかなかったよ。モデルの方との絡みもよかったし」

「……嫉妬した？」

「え？」

思わず鏡を見ると、雄馬くんは意地悪い顔で笑っている。からかわれてるな、これ。

「ドラマでいっぱい見てるし。素敵だなって見てたよ」

「……そっかあ」

「あ、さっき虹川さんにご挨拶ができて。雄馬くんの魅力を引き出せてたよって褒められちゃった」

「そりゃそうだよ、だってずっと俺のこと見てたのは涼香さんだし」

「ふふ、もっと場数踏んだら成長できるって言ってもらって……私も頑張らないと」

急に手首を掴まれる。どうしたの？と聞いても俯いた雄馬くんは返事をしてくれない。手を引かれ横へ移動すると、今度は強く腕を引かれて顔が近づいた。

「他の人も担当するの？」

「え、いや、今でも何人かヘルプで入ったりしてるし……もっとたくさん仕事取りに行こうかなって」

「別に俺もほぼ毎日仕事入ってるし、それじゃまだ足りないってこと？
あ、俺がもっと忙しくなればいいのか。そしたら場数、増えるもんね？」
「ゆ、雄馬くん？」

楽屋では見たことがない、ギラついた瞳が真っすぐ私を射抜く。雄馬くんの手がするする上って、頬を撫であげた。

「あっ……ちょ、雄馬くん」
「俺には毎日触るのに、俺から触るのはだめ？」
「だってこれは仕事だから」
「じゃあ、仕事じゃなかったら？」

まだラメが残る頬が照明に照らされてキラキラ光っている。ちゃんと落とさないと、なんて場違いなことを考えれば、短いキス。

「ダメだよ、ここ楽屋……！」
「じゃあ今度は外で会おうか。そこならいいんでしょ？」
「んんっ！そ、じゃなく、て！」

腰を引き寄せられ、座っている雄馬くんの膝に乗り上げるようにしてキスをされる。唇を食むようにしたと思えば、じっとり舐め上げられてビリビリと脳みそに警鐘が鳴った。濡れたからか冷たい手が頬を撫でて、そのまま耳朶を柔くなぞる。

「あうっ♡や、それ……」
「はは、かわいー……。耳好きなんだ？知らなかったなあ」
「そんなことない、も、ダメだって……んん♡あ、ふ、う……ッ♡」

舌が侵入して、口内をじっくり舐っていく。上顎を舌先でなぞられれば鼻から甘い声が漏れて情けない。肩にかかったバスタオルをぎゅっと握っ

て快感をどうにか散らそうとする。だって雄馬くんは大事な商品で、今をときめく人気俳優で、それで……。

「ほんとにダメ？やめる？」

するする頬を撫でられ、視界は全部雄馬くん。リップよれてる……。無意識にはみ出たソレを指で拭えば、するりとTシャツの裾から手が侵入してきた。素肌に広い手のひらが這って鳥肌が全身にたつ。だめだ、雄馬くんに触れられると。

「……やめないで」

自分でも驚くほど小さな声だった。それでも雄馬くんには届いたらしく、垂れた目が嬉しそうに細められる。

「あっ、やだ、なんかへん……」

「ん？なにが？」

「ぞわぞわする……う♡」

「あは、楽屋で襲われて興奮してるんだ？」

「ああっ！♡ゆ、うまく……」

下着の上からふにゅ、と胸を揉まれる。控えめな大きさを楽しむように指が埋められて、ぎゅっと肩を掴んでしまった。どうしよう、止めないといけない。ぐるぐる回る思考は落ち着くことが無くて、その間にTシャツと下着はまくり上げられてしまった。

ちゅう♡ぺろぺろ♡かりかりかりっ♡

「んん〜〜〜っ！？♡あ、や、吸わないでっ！あ、ああ♡」

「乳首触られるの気持ちいい？ほら、周りカリカリ～ってするのと、ぴんぴん弾かれるのどっちが好き？」

「やだ、どっちもやだ♡」

「もう、涼香さんって意外とわがままなんだから」

きゅう♡と乳首を抓られて脚の力が抜ける。ばちばち目の裏で光る快感に耐え切れず、雄馬くんの太ももに座り込み抱き着いた。さわさわ腰を撫でた手はそのまま下へと滑り、スラックスに侵入する。拒もうとしても立ち上がれず、乳首に与えられる快感に腰を揺らすしかできなかった。

あ、ダメだこれ♡腰揺れちゃって、太ももに擦り付けちゃう……♡

気づいた時には止められなくて、ずりずりと布越しにお股を押し付ける。最悪、こんなのまるで雄馬くんの太ももで……。

「やだやだ言うのに、俺の脚でオナるのやめて？」

「あうっ♡ごめんなさ……♡」

「なに？涼香さんってMなの？はー……今まで猫被ってたの意味ないってわけ？」

「え？どういう……」

ぐるん、と身体向きを変えられて、雄馬くんにもたれかかるようになる。いつのまにか体温の上がった手が下着のクロッチ部分をゆっくり撫であげた。ぐちゅりと湿った音がして、興奮しているのがバレて首が熱くなる。

「俺の方が年下だし、可愛い路線でいった方がウケいいかなって思ってたのに。撮影中の方がうっとりこっち見てくるからさあ……いつグイグイこうか迷ってたんだよね」

「あ、あ、そこ、クリ、だめ♡コリコリ、や、あ……♡」

「なのに楽屋で手出されて拒否できないくらい押しに弱くて、恥ずかしい
こと言われて嬉しそうだし」

「ちがっ、そんなことない、いい♡」

「違うの？キスと乳首でこんなにドロドロにしといて？……はは、嘘つ
き」

「んん〜〜〜〜っ！？♡あ、あ、ああああっ♡イク、イっちゃ……ッ
♡♡」

2本の指でクリを挟まれ、激しく扱かれる。直接的で強すぎる刺激に、
あっけなく達してしまった。

くたりと体重を預けて息を整えると、後ろから顎を掴まれ前を向かされ
る。目の前には、鏡に映るだらしない顔の私と、いつもカメラに向けられ
た捕食者のような雄馬くん。

ひと際胸が大きく脈打ち、身体中に熱が駆け巡る。その顔を向けられる
なんて思ってもいなかったのに。スタッフも誰もいない、私だけに向けら
れた表情はただ私を求めている。

ぐちゅん、と指が2本埋め込まれる。その質量に顔を逸らせば、耳に唇
を寄せられた。

「こら、ちゃんと鏡見て。俺に気持ちよくさせられてる顔、真っ赤でかわ
いい」

「うそ……っ♡あ、や、そこ……♡」

「気持ちいいとこ？G スポごしごしされるの好き？」

「あ……うん♡きもちいい……♡あ、あ、あう♡ふ、んう〜〜〜♡」

腰を揺らすと、ごりっと硬いものがお尻に当たる。思わず硬直すると、
それを察したのか雄馬くんは熱いソレを擦り付けてきた。頭の片隅が冷静

になる。それを受け入れてしまったら、もう絶対後戻りできない。拒もうと口を開いても、だらしない甘ったれた声が楽屋に広がる。

「あっそ、れ……え♡」

「だって涼香さんが擦り付けてくるから。ねえ、これどうしたい？」

「あっあ、ああ、あ"~~~~~♡♡て、とめて♡ぐちゅぐちゅしない、でえ♡」

「ほら、教えてくれないと手マン止めてあげないよ」

ぐちゅぐちゅぐちゅっ♡ちゅぱっ♡れろ~~~~っ♡

3本目の指がいれられ、ナカを搔きまわしてくる。耳元で甘く囁いては、耳朶や淵をゆったりなぞられ甘噛みされ身体が跳ねた。G スポを捏ねられて、重たい快感が身体にどんどん蓄積されていく。

頭が回らない、でも止めなきゃいけない。なんで？だって雄馬くんは俳優で。ああ、久しぶりの人から触れられる快感が堪らない。気持ちいい、もっと……。

ぐちゃぐちゃの思考で鏡越しの雄馬くんを見ると、ドラマのときよりもっと甘くて嬉しそうに笑っていて。なんかもう、それならいいんじゃないか。だってずっと私は、この瞳に見つめられたかった。彼が欲しかった。

触れられたらどんなに気持ちいんだろうって、考えなかったかと言われたら嘘になる。それなら、都合のいい夢だと思えばいい。

「ほしい……♡ゆ、まくんの、ココに、挿れ、て？♡」

言いながらキュッ♡とナカを締めると動きが止まる。ヤバい、流石に引かれた？ひやひや鏡を見つめると、下着ごとストラックスを引き抜かれる。

急に外気に晒されて戸惑っているうちに、膝から降ろされて鏡に手を付かされた。

「ほんつとに……そんな煽られたら我慢できないだろ普通」

「あっ、ゆっくり、おねが……♡」

「俺、知ってるからね？ 激しい濡れ場撮影のとき、食い入るように見てくること」

「そんなこと、してな、あ"ああああっ！？♡」

ばちゅんっ！♡

遠慮なく奥まで押し込められて、そのままイってしまう。ガクガク震える身体を支えるように腰を掴まれ、散々いじめられたGスポをゴリゴリ抉られた。

「まって、いった……っ！♡イって、るう♡あ、あ、ん"おっ、あ"あ～～♡♡」

「ナカあっつ……♡めっちゃ気持ちい」

「やあっ♡ちくび、つままないれ！♡またイっちゃ……あ！♡」

「だってこんな揺れてるおっぱい見せつけられたら、触るだろ」

「みせつけてないいいいい！♡あ、お、お"おっイ……っ♡♡」

パンパンパンパンッ♡こりこりこりっ♡ぎゅ～～♡

激しいストロークは確実に私の気持ちいいところと、奥の重たいところを仕留めてきて、いくたびにその熱を感じた。言いがかりをつけて弄られる乳首は赤く腫れてしまっ、大きくなったように錯覚する。

痙攣するように絶頂しても雄馬くんは止まってくれなくて、必死に鏡に縋りついてはその綺麗な顔が欲に歪むのを見つめた。

「はっ、そんなに俺の顔すき？」

「あ、あ、んんっ♡は、うん♡世界で、一番かっこいい……う"あっ！？♡
やだ、おっきく、しないで♡」

「今のは涼香さんが悪い……っ！」

どんどん腰の動きが激しくなっていく。あ、やばい重いのくる……っ！
ぎゅっと拳を握ったそのとき。

コンコン。

「桜井さん、今よろしいですか？ケータリングのご用意あるんですがあ」

私が楽屋に戻ってきたとき、内側から鍵は掛けていない。こんな、いつ
誰が来るか分からないのにこんなことしてたなんて……！冷静な思考が少
し戻ったのを察したのか、雄馬くんの手のひらが私の口元を覆った。

「すみません、今シャワーから上がったところで……着替えてました」
「ん"！？♡」

ずろ~~~~♡にゅぷ~~~~♡

扉を隔てて女性のスタッフさんがいるのに、ゆったりと動きが再開され
る。さっきより動きが鮮明に感じられて、ごりごり内壁を擦られるのが分
かってしまう。雄馬くんの手を力なく叩いても、あやすように支えられた
腰を撫でられるだけ。

バレちゃうかも、どうしよう、でも気持ちいい。無意識にナカを締めつけ
て悪循環に腰が揺れる。

「ケータリングは後で取りに行くので。ありがとうございます」

「そうですか……今日の撮影、すごくカッコよかったです！」

早くどこか行って……！どこか甘ったるい声のスタッフさんは雄馬くんと少しでも長く喋りたいらしい。

「はは、ありがとうございます」

「それで、今度その、お食事でも……」

思わず、ぎゅっとナカを締めつける。今までずっと何も思わなかったのに。スキャンダルが全く無かったわけじゃない。誰かから連絡先を渡されている場面だって、何回も見た。

ぐっと口を覆う手に力が入る。息苦しい、と見やればぺろりと舌なめずりをする綺麗な顔。あ、終わった。

がちゅんっ！♡ぐりぐりぐりぐり〜〜〜〜〜ッ♡♡♡

「ん"んっ！？♡♡〜〜〜〜〜っ♡♡」

「すみません、そういうのは事務所から止められてて。……っ、少し、疲れてるので仮眠をとってもいいですか？」

「わ、分かりました。上の者に伝えておきます」

「ありがとう、ございます」

スタッフさんが遠ざかっていく足音も、次第に聞こえなくなった。雄馬くんが一つため息を吐いたと思えば、口元から手が離れて酸素が多く取り込めるようになる。

「は、はぁっ！う"、うぁっ♡も、なんでずっと……お♡」

「私のこと見てって、ずっときゅうきゅう締め付けてきたのは、涼香さんでしょ？」

「してない、してな……あ♡♡」

「スタッフさんと話してる間にもイっちゃった悪いお姉さんは、どこの誰だよ」

「お"おっ！？♡あ"、あ"、ああん♡ごめんなさ、わたし、です♡お"お～
～～～～っ♡♡これやだ、きもちい……♡♡」

「ちゃんと気持ちいいって言えてえらいね♡」

肩に手がかかり、上半身をぐうーっと反らされる。角度が変わって、先っぽがお腹側のイイところに引っかかる。汚い喘ぎ声が止められなくて、必死に雄馬くんの手に縋りついた。

「あんまりおっきい声出したら、またあの子戻って来ちゃうかも」

「でも、きもちよすぎて♡♡こえ、むりい……♡ゆうまく、はっ、あんっ、はあ……♡止まって、あ"、あ"、あ"あああっ♡♡お、お"、ん"んっ！
んむう……♡う、う、お"、ん"～～～～♡」

肩口から顔を寄せられて無理やり唇を塞がれる。左手で耳も塞がれて、くぐもった自分の喘ぎ声が脳みそに反響した。この声も、はしたない唾液が混ざる音も、自分のおまんこから聞こえる水音も、全部雄馬くんに引き出された自分のものだと思った途端、知らない快感が全身を巡る。

ガクガク全身が震えて、必死に雄馬くんの首元にしがみ付く。

「おは、ちょ、まって♡なんか、ん"んっ♡もれ、ちゃ……ううう♡やだっ、こわい、う"あっ♡や、やだ……あ、ゆうまく、ん……ああんっ♡」

「いいよ、ぜーんぶ出しちまえよ。ほら、ほら♡俺がしっかりエロい姿見といてやるから♡」

「あっ、でちゃう♡イグイグイ……っ♡♡お"お……っ♡♡」

ビクビク♡♡びゆるるるるっ！♡ぷしゃあ～～～～♡♡

普段は雄馬くんを綺麗にする場所で、汚し汚されるのに酷い背徳感を感じる。潮吹きしたあとすぐに背中に熱いものが掛かった。強すぎる刺激に力が抜けた私を、雄馬くんは優しく抱き止めてくれる。

「もういい子ぶるのやめるわ。絶対俺のものにするから、覚悟してね涼香さん♡」

とんでもないことになったのかも、と思いながらソファーに座らされた私はぼんやり頷くしかなかった。

【このあとの展開】

楽屋で一線を越えてしまった涼香と雄馬の関係が、仕事だけでは済まなくなっていく……。

「今日は送るだけ」

「次は、涼香さんが家に入れてくれる時に」

さらに、虹川の撮影をきっかけに涼香へ別俳優のメイク依頼が入り、雄馬は仕事だと分かっているにもかかわらず静かに嫉妬を見せるように。

「俺をメイクしてるときと同じ顔であいつに触るかと思うと、嫌」

他にも

- 雄馬宅でのあまあま世話焼き
- クンニ→手マン→潮吹き→クリ責め→連続絶頂で恋人えっち♡
- デビュー直後から続いていた雄馬の本音
- 涼香から甘えられるようになるハッピーエンド

を、約12000字で収録！

続きはぜひ販売版でお楽しみください♡